

ウィトゲンシュタイン『心理学の哲学に関する最終草稿1』と手稿(MS137後半、MS138)の比較：載録されなかった内容を中心に

著者	菅崎 香乃
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	114-128
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122577

ウィトゲンシュタイン『心理学の哲学に関する最終草稿 1』 と手稿 (MS137 後半、MS138) の比較

——載録されなかった内容を中心に

菅崎 香乃

『心理学の哲学に関する最終草稿 1』 (*Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol. 1 以下『最終草稿 1』と略記) は、そこから『哲学探究』 (以下『探究』と略記) 第II部の半分以上がとられたことに鑑みても、ウィトゲンシュタインの、いわゆる「心理学の哲学」を解明するうえで、重要なテキストのひとつであることは疑いない。加えて、これはかれが日々の考察を書き付けた手稿 (MS137 後半、MS138) ¹ に基づいており、その思考を時系列に沿って辿ることができる点からも興味深いものである。しかし、そのとき留意すべきは、発刊にあたり載録されなかった情報があることだ。それは、主に以下の 3 点である。(1) 書かれた日付、(2) 哲学の仕事とは区別される一般的性格の考察² (多くは『反哲学的断章』に載録されている)、および日記的な記述 (暗号で書かれたものも含まれる)、(3) 異稿 (どれを掲載すべきか判断がつかなかった場合という但し書きのもと一部載録されている³)。

これらの情報のほとんどは、哲学的な主題を直接扱うものではなく、個人的な内容も含まれることから、掲載が見送られたのも納得できる。しかし他方で、行きつ戻りつしながら、ときには日をまたいで進むかれの思考のリズム、音楽や宗教に対する考え、あるいは、自分の探究をそのときどう評価していたのかといったことが、これらから読みとられることもあり、かれの思考の全体像を把握するのに少なからず寄与すると思われる。

ひとつ例を挙げるとすれば、『最終草稿 1』52 節は、載録されなかった内容を併せて読むことで、理解のための新たな視点が得られる好例と言える。

かのゲームで、「weiche」という語⁴をときはこう、ときにはこう体験すると、鋭敏な耳が示すならば、——それはまた、わたしが理解し、何らかの意味で体験する文全体の脈略において、あの語自体を多くの場合まったく体験しないということも示さないか。(MS137 p.82a (48年10月27日), LW1 52)

ここから数日にわたり、このいわゆる「意味体験」の主題が探究されることになるが、この直前には『最終草稿1』には載録されなかった記述がある。

「考えることは難しい」(ウワード)。これはいったいどういうことなのか。なぜ難しいのか。——「見ること(Schauen)は難しい」と言うのと、それはほとんど同じである。集中して見ることは難しいからだ。そして、集中して見てもなにも見え(sehen)ないことがある。あるいは、何かが見えていると再三思っている、鮮明に見えていないこともあるかもしれない。なにも見えていないのに、見るのに疲れることがある。(MS137 pp.81b-82a (48年10月27日), CV p.85)

このテキストは、そのはじまりとおわりに引かれた縦線によって前後の記述から区別され、考察の性格が異なることをウィトゲンシュタイン自身が示唆しており、『反哲学的断章』に入れられている。おそらくはそのために、『最終草稿1』には載録されなかったものと推察される。内容的にも、哲学的な考察というより自身の仕事に対する警句といった雰囲気がこの考察にあることはたしかである。

しかし同時に、この記述は「sehen als (に見える)」と定式化されるアスペクトの議論を思い起こさせる。というのも、ここには「見ること」と「見えること」を分ける視座があるからだ。これは、コピー等によって再現される知覚の対象と、それによっては必ずしも再現され得ない特定の見え方を分ける(cf. PI II xi111, 112, 135 etc.)アスペクトの議論に共通する構図である。のちの展開を先取りすれば、アスペクト体験と意味体験に連関があることがはっきりと指摘されることになるが(LW1 784, PI II xi261)、これを念頭に置けば、『最終草稿1』に載録されなかった「見え

ること」についての考察と「意味体験」を主題にする 52 節以下を、つながりのある考察として読むことができるようになる⁵。

もうひとつ興味深いのは、これも『最終草稿 1』では落とされている「[Zu T.Scr. S.653]」というメモ書きが、52 節につけられていることである⁶。その意味するところは、『心理学の哲学 2』としてのちに出版されたタイプ原稿、TS232 の 653 ページ (193-196 節) を参照せよという指示である⁷。そこでは、雑駁に言えば、「考えること」と「想像のなかで語ること」(RPP2 193)、「想像」と「スケッチを見ること (sehen)」(RPP2 195)、そして「見せられたもの」と「意味体験」(RPP2 196)へと、各節が互いにモチーフを共有しながら、考察が展開していく⁸。これは「考えること」から「見えること」を通して「意味体験」へつながるここでの議論と、近い展開だと言えよう。

以上のように、草稿に書かれた内容 —— 『反哲学的断章』 p. 85、『最終草稿 1』 52 節、『心理学の哲学 2』193-196 節 —— を逐一追うことによって浮かび上がるのは、「意味体験」がその一部を形成するひとつの問題圏である。これはウィトゲンシュタインに特徴的な思考のスタイルと言えようが、ひとつの主題は単独で完結するわけではなく、さまざまな要素とそれぞれに結びつきながらゆるやかに広がっている。「意味体験」という主題も決して単独で成立しているわけではなく、ここに見られるように、「考える」から「見える」や「聞く」へ、あるいはまた「想像する」や「体験する」へとつぎつぎに連なる多様なモチーフを背後に従えている。こういった問題の広がりを見野におさめることは、52 節の考察がどのような連関のなかに位置づくのか、より適切な理解に資するであろう。

このように、哲学的主題に必ずしも関連しない性格の考察を追うことも、ウィトゲンシュタインの探究の全体像を捉えるためには、ときに手がかりになることがある。『最終草稿 1』を対象とする将来的な研究の材料を準備することを目的として、本稿では (1) 日付、および (2) 一般的な性格の考察、日記的記述の情報を一覽で提示する。なお、(3) 異稿については、単語や表現の選択を比較することで要点が理解できるようなケースもあろうが、量が多く (細かいものもすべて含めれば、およそ 3 分の 1 の節に異稿がある) あまりにも煩瑣になること、また取捨をしよう

にもその選択が恣意的にならざるを得ないことから、掲載は見送った。

凡例

1. 手稿の底本

Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electronic Edition, Oxford University Press, 2000. を用い、基本的に Diplomatic transcription を参照している。ただし、暗号文のドイツ語への変換については Normalized transcription を参考にした。言及に当たっては、フォン・ライトによる目録番号を付し、ページ番号 (a は左、b は右ページを指す) を示した。

2. 本稿の対象範囲

『最終草稿 1』は、MS137 後半、MS138 を編纂したものであるが、これは『心理学の哲学 2』として知られるタイプ原稿 (TS232) の基になった手稿のつづきである。TS232 に組み入れられた 48 年 8 月 25 日以降、48 年 10 月 19 日から 49 年 5 月 20 日までの記載を対象にしている。

3. 略号

ウィトゲンシュタインのテキストからの引用は、以下の略号を用い、節番号あるいはページ番号を割り注にて示した。

CV 『反哲学的断章』: *Culture and Value*, Revised Edition, ed. by G.H. von Wright, Basil Blackwell, 1998. (丘沢静也 訳『反哲学的断章—文化と価値』, 青土社, 1999.)

LW1 『最終草稿 1』: *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol.1, ed. by G.E.M. Anscombe, G.H. von Wright and Heikki Nyman, Basil Blackwell, 1982.

LW2 『最終草稿 2』: *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol.2, ed. by G.H. von Wright and Heikki Nyman, Basil Blackwell, 1992.

PI 『探究』: *Philosophical Investigations*, Revised 4th ed., ed. by P.M.S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell, 2009. (藤本隆志 訳『哲学探究』, ウィトゲンシュタイン全集 第 8 巻, 大修館書店, 1976., 黒崎宏 訳・解説『『哲学探究』読解』産業図書, 1997., 丘沢静也 訳『哲学探究』岩波書店, 2013.) (第 II 部は、Blackwell 第 4 版で「心理学の哲学—フラグメント」とされているが、本稿では、慣例に従って『探究』第 II 部、および PI II で通した。)

RPP1 『心理学の哲学 1』: *Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol.1, ed. by G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright, Basil Blackwell, 1980. (佐藤徹郎 訳『心理学の哲学』1, ウィトゲンシュタイン全集 補巻 1, 大修館書店, 1985.)

RPP2 『心理学の哲学 2』: *Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol. 2, ed. by G.H. von Wright and Heikki Nyman, Basil Blackwell, 1980. (野家啓一 訳『心理学の哲学』2, ウィトゲンシュタイン全集 補巻 2, 大修館書店, 1988.)

4. 記号

手稿の Diplomatic transcription において下線が引かれた語は、『最終草稿 1』『反哲学的断章』の表記法に倣い、イタリック体にて表記した。対応する和訳は、傍点で示している。なお、〔 〕は引用者の補足である。また、表 (2) の記号法については当該表に凡例をつけた。

(1) 『最後の草稿1』 節番号と書かれた日付との対応

年	月	日	ページ	LW1
MS137				
48	10	19	76a	
		22	76a-77b	1-9
		23	77b	10
		24	77b-78b	11-20
		25	78b-80a	21-38
		26	80a-81a	39-45
		27	81a-82b	46-56
		28	82b-83b	57-68
		30	83b-84b	69-73
		31	84b	74
		11		2
3	85a-87b			79-100
4	87b-88b			101-112
5	88b-89b			113-120
6	89b-90b			121-129
7	90b-91a			130-137
8	91a-92a			138-145
9	92a-93a			146-153
10	93a-94a			154-163
12	94a-95b			164-179
13	96a-b			180-189
14	96b-97b			190-198
15	97b			199
16	97b			200-202
17	98a-99a			203-205
18	99a-99b			206-210
19	100a-102a			211-235
20	102a-103b			236-241
21	103a-104a			242-251
22	104a-105b			252-267
23	105b-106b	268-278		
24	107a-108a	279-298		
25	108b-109a	299-304		
26	109a-b	305-308		
27	109b-111a	309-325		
28	111a-112b	326-346		
29	113a-b	347-350		
30	113b-114a	351-356		
12		1	114b-115b	357-377
		2	115b-116a	378-382
		3	116a	383
		4	116a-117a	384-392
		6	117a-118b	393-404
		6	118b	405-408
		8	119a	409-411
		8	119a-119b	412-415

年	月	日	ページ	LW1
MS137				
48	12	9	119b-120a	416-423
		10	120a-b	424-430
		11	120b-122b	431-450
		12	122b-125a	451-479
		13	125a-126a	480-491
		14	126a	492
		15	126a-b	493-500
		16	127a-128b	501-517, 519
		17	128b	518, 520-521
		18	128b-129b	522-531
		20	129b	532-533
		21	129b-130a	534-536
		22	130a-b	
		23	130b-131b	537-548
		24	131b-134a	549-582
		25	134a-135a	583-599
		27	135a	600
		28	135a-b	
		29	135b	601-604
		30	135b-136b	605-612
31	136b	613		
49	1	1	136b-137b	614-621
		2	137b-138a	622-628
		3	138a-139a	629-639
		4	139a-140b	640-655
		5	140b	656-657
		5	140b-142a	658-676
		7	142b-143a	677-686
		8	143a	687
		9	143a-b	688-694
MS138				
49	1	15	1a-2a	695-705
		16	2a	706
		17	2a-3a	707-713
		18	3a-4a	714-719
		19	4a-5a	720-732
		20	5a	733
		21	5a-7a	734-752
		22	7a-8a	753-762
		23	8a-b	763-768
		24	8b-9a	769-775
		25	9b	776
		26	9b-10a	777
		27	10a-b	778-784
28	11a	785		
29	11a-12a	786-791		

年	月	日	ページ	LW1	
MS138					
49	1	30	12a	792-793	
		31	12a-13a	794-800	
		2	1	13a	801-803
			2	13b-14a	804-807
			3	14a-b	808-812
		4	14b	813-816	
		5	14b-15a	817-822	
		6	15b-16a	823-835	
		8	16b	836-840	
		9	16b-17b	841-847	
		10	18a	848-850	
		12	18a-b	851	
		13	18b-19b	852-863	
		14	19b-20a	864-872	
	15	20a-21b	873-887		
	16	21b	888-891		
	17	22a-b	892-898		
	18	22b-23a	899-901		
	19	23a-b	902-905		
	20	23b	906-907		
	21	24a	908-909		
	22	24a-25b	910-924		
	23	25b-26b	925-931		
	24	26b-27a	932-935		
	25	27a			
	26	27a-b	936-937		
	27	27b-28b	938-949		
	28	28b-29a	950-953		
3	1	29a	954-956		
	2	29b-30a	957-960		
	3	30a	961-964		
	16	30a-32b	965-978		
5	20	32b-33a	979		

- *¹ LW1に載録されていない記載がある。表(2)参照のこと。(48年12月28日、49年2月25日も同様)
- *² 日付は7を消し6と記入。
- *³ 日付は7を消し8と記入。
- *⁴ 518を翌17日に書き、519の前へ入れる指示。
- *⁵ 5日の記載は2つある。

(2) 『最終草稿1』に載録されていない記述

- 凡例
- ・ 該当箇所は手稿の日付とページ番号にて示し、加えて『最終草稿1』の対応箇所を節番号、およびa-cの段落記号で示した。なお、節と節のあいだに位置する場合、記号Vで表した。(例：51V52は、51節と52節のあいだにあるの意)
 - ・ 『反哲学的断章』に載録があるものは、CVと略記し、ページ番号を原著/和訳の順で言及した。なお、『反哲学的断章』は、手稿において一連のメモがはじまるページ番号を記載しているため、本稿のページ番号とは一致しない場合がある。
 - ・ 『反哲学的断章』に載録されていないものは原語を記載し、〔 〕にて拙訳あるいは註解を補った。
 - ・ 手稿において暗号文で記載されている場合には、冒頭に「暗号文」と記し、ドイツ語に変換された文を挙げた。
 - ・ 異稿がある場合、記号//で併記している。

年	月	日	MSページ	LW1	内容
MS137					
48	10	19	76a	V1	CV p.84/ p.202
		26	80b	41	[Z.T.S.S 652] [[RPP2 190-192を参照]]
		27	81b-82a	51V52	CV p.85/ p.203
			82a	52	[Zu T.Scr. S.653] [[RPP2 193-196を参照]]
	28	83a	61	[Zum letzten Satz auf S.82v.] [[LW1 56を参照]]	
	11	4	88a	108V109	暗号文 Scheue dich nicht Kindereien // kindische Gedanken aufzuschreiben, wenn <i>das</i> die Gedanken sind, die Du denken mußt. - Bist du nicht über diese Gedanken – hinaus, so magst du es nur ruhig zugeben. [子どもじみた言動//子どもじみた考えを書き付けることを恐れるな。それがきみが考察すべき考えであるときには。——この考えを克服していないなら、ただ静かに認めるしかない。]
			88a	108V109	CV p.85/ p.203
			88b	111a,bVc	CV p.85/ p.203
			5	89b	118V119
		14	97b	198V199	CV p.85/ p.204
		19	100a	210V211	CV p.86/ p.205
		20	102a	236V237	CV p.86/ p.205
		21	104a	249V250	CV p.86/ p.205
			104a	249V250	CV p.86/ p.205
		22	104b	253V254	CV p.86/ p.206
		23	106a	270V271	暗号文 Bist Du wirklich dumm, so mußt Du Dir's gestehen: darin liegt der Ernst dieser Untersuchung. [きみがほんとうに愚かなら、それを認めねばならない。そこにこの探究の真剣さはある。]
				106b	278V279
	28		111b	331V332	CV p.86/ p.206
	29	113a	346V347	CV p.86/ p.206	
		113a	346V347	CV p.86/ p.206	
113a		346V347	CV p.86/ p.207		
12	10	120a	424V425	CV p.87/ p.207	
		11	122a	446V447	CV p.87/ p.207
	12	123a	453V454	[Hier endet vielleicht diese gute Periode. [[ここで、ひよっとすると、このよい時期が終わるかもしれない。]]	

年	月	日	MSページ	LW1	内容
MS137					
48	12	16	127a	503V504	CV p.87 / p.208
		18	129a	528V529	Philosophy serves to remove misconceptions. [Die Rolle der Philosophie im Denken über die Religion.] [哲学は誤解を取り除くのに役立つ。[宗教について考える際の哲学の役割]]
		22	130a	536V537	CV p.87 / p.208
			130a	536V537	CV p.87 / p.208
			130a	536V537	CV p.87 / p.208
		22	130a	536V537	CV p.87 / p.208
			130a	536V537	CV p.87 / p.209
			130a-b	536V537	CV pp.87-88/ pp.209-210
		25	134b	591V592	CV p.88 / p.210
			134b	593V594	CV p.88 / p.210
		27	135a	599V600	暗号文 CV p.88 / p.210
		28	135a	600V601	CV p.88 / p.210
			135a	600V601	暗号文 Es wäre interessant meine Schrift in guten und schlechten Zeiten zu studieren. In guten Zeiten hat sie natürlich Schwung und das bloße Schreiben macht mir Vergnügen. In schlechten, d.h. Unproduktiven, ist sie schwunglos und kleinlich. (Wie z.B. Jetzt.) Und das kommt <i>nicht</i> nur daher, daß ich lieber gute Gedanken aufschreibe, als armselige, sondern ist, glaube ich, .. hängt mit dem Arbeiten des Nervensystems überhaupt zusammen. [順調な、あるいは不調なときのわたしの文字を調べてみることは面白いだろう。順調なときには、言うまでもなく勢いがある、ただ書くだけで楽しい。不調なとき、すなわち生産的でないときは、勢いがなく堅苦しい。(たとえば、いまのように。)そして、それは価値のない考えより優れた考えのほうを書き付けたいということに起因するだけでなく、思うに、神経システムの働きに総じて関係しているのだ。]
		31	136b	612V613	CV pp.88-89 / p.211
49	1	1	137a	616V617	CV p.89 / p.213
		4	140a-b	654V655	CV p.89 / p.213-214
			140b	654V655	CV p.89 / p.214
		5	141a	661V662	CV p.90 / p.214*1
		7	143a	686V687	CV p.90 / p.214
		8	143a	686V687	CV p.90 / p.214
			143a	686V687	[Protz nicht mit Deinem Reichtum.] [[おまえの豊かさを鼻にかけるな。]]
MS138					
49	1	15	1a	694V695	暗号文 War diese Woche krank. Magengrippe. Kann auch jetzt noch nicht arbeiten, und wer weiß ob es wieder gehen wird. [今週は具合が悪かった。腸の感染症。いまでもまだ仕事ができない。ふたたび回復するか、だれが知るのか。]

年	月	日	MSページ	LW1	内容	
MS138						
49	1	17	2a	706V707	CV p.90/ p.214-215	
			2a	706V707	CV p.90/ p.215	
		18	3a	713V714	CV pp.90-91 /p.215-216	
			3a	713V714	CV p.91/ p.216	
			4a	718V719	CV p.91/ p.216	
		19	4b	724V725	CV p.91/ p.216	
			4b	724V725	Ich habe Schmerzen. Soll ich schon wieder Medizin nehmen, oder nicht; soll ich mich einer schweren Operation unterziehen, oder nicht? Es ist oft schwer zu entscheiden. Oft kann man nur <i>warten</i> , und im Zweifel warten, das ist das Schwerste. [痛みがある。また薬を飲むべきか否か、つらい手術を受けるべきか否か。決断するのはたいてい苦しい。しばしばひとは待つことしか、しかも、疑いのなかで待つことしかできず、それが一番つらい。]	
		21	5b	735V736	CV p.91/ p.217	
		22	8a	761V762	CV p.91/ p.217	
			8a	762V763	暗号文 <i>Sehr</i> müde. Vor einer neuen Krankheit? [とても疲れる。新しい病気の前兆?]	
		23	8b	766V767	CV p.91/ p.217	
		24	9a	770V771	CV p.91/ p.217	
			9a	771V772	CV p.92/ p.218	
		25	9b	776V777	CV p.92/ p.218	
		28	11a	784V785	CV p.92/ p.218	
		29	11b	787V788	暗号文 Noch immer sehr krank. Übermorgen zum Spezialisten. Ob das meine letzte Krankheit ist? - Drury wird mir, glaube ich, nach und nach untreu. Er hat Freunde gefunden, mit denen sich es leichter leben läßt. [依然としてとても具合が悪い。あさって専門医のところへいく。これがわたしの最後の病気なのか。——ドゥルーリー* ² はどんどんわたしに誠実でなくなっているように思う。かれは、もっと気楽にやっていたいける友人を見つけたのだ。]	
		30	12a	792V793	CV p.92/ pp.218-219	
			12b	796V797	暗号文 War beim Arzt, der sagt, mir fehle nichts Ernstes, nur Gastritis. Ich glaube er hat recht, vertraue aber seiner Therapie nicht. [医者が言うには、胃炎以外に重いところはないとのことだ。かれは正しいと思うが、治療は当てにしていけない。]	
		2	2	13b	804V805	CV p.92/ p.219
					804V805	CV p.92/ p.219
					804V805	CV p.93/ p.220
804V805	CV p.93/ p.220					
807V808	暗号文 Bin wieder gesund, oder beinahe gesund. [また元気になった、あるいはほとんど元気だ。]					
6	15b		822V823	暗号文 Bin wiederum kränklich. Meine Nerven in schlechtem Zustand. [またもや、具合が悪い。わたしの神経はよくない状態だ。]		

年	月	日	MSページ	LW1	内容
MS138					
		9	17a	842V843	Philosophen wie Wisdom, Ayer, u.a. Sie zeige Dir einen Bund gestohlener Schlüsseln //Bund Schlüsseln den sie gestohlen haben, aber sie können keine Türen damit öffnen. [ウィズダム* ³ やエイヤー* ⁴ たちのような哲学者。かれらはくすねた鍵の束をきみに見せるけれども、それではどのドアも開けることができない。]
		10	18a	849V850	暗号文 Große Schwäch und Schmerzen. Mining im Sterben. <i>Größer</i> Verlust für mich und Alle. Größer als ich geglaubt hätte. [とても弱っていて、つらい。ミンク* ⁵ が死の床にある。わたしにとって、皆にとって、大きな喪失。わたしが思ったよりも大きな。]
		22	25a	919V920	CV p.93/ p.220
		25	27a	935V936	暗号文 Telefongespräch mit Gretl (in England). Sie hat übers Telephon in Wien gehört, Mining liege im Sterben, erkenne niemand mehr, schlummere friedlich. - Ringsherum werden die Wurzeln abgeschnitten, an denen mein eigenes Leben hängt. Meine Seele ist voller Schmerzen. Sie hatte vielseitiges Talent und Verstand. Aber nicht nackt zu Tage liegend, sondern verhüllt; wie die menschlichen Eigenschaften liegen <i>sollen</i> . [(イギリスにいる)グレーテル* ⁶ と電話で話した。ウィーンの電話で彼女が聞いたところによると、ミンクは死に瀕している、もうだれのこともわからず、静かに眠っている。——わたし自身の生が依っている根は、ぐるりと断ち切られるのだ。わたしのこころは痛みで満ちている。彼女は多方面に才能があり、分別があった。しかし、白日のもとにむき出しにではなく、覆い隠されて、ひとの性質がそうあるべきように。]
		27	28a-b	944V945	CV p.93/ p.221-222
			28b	944V945	CV p.93/ p.222
		28	29a	953V954	暗号文 Es scheint, daß ich nicht mehr arbeiten kann, und zwar macht es mir den Eindruck, daß ich <i>nicht</i> nur an einer kurz vorübergehenden Müdigkeit leide. Ich glaube die Anstrengung, die Arbeit und die Sorgen und Krankheit haben mich auf längere Zeit hin arbeitsunfähig gemacht. Ich bin in der schlimmen Lage, kein Mittel zu haben, um mich zu erholen. [自分にはこれ以上仕事ができないように思える。つまり、たんなる短い一時的な疲労ではないという感じがある。緊張、苦勞、不安そして病気で、ますます長い時間、仕事ができなくなっているのだと思う。わたしはひどい状態で、起き上がるすべがない。]

年	月	日	MSページ	LW1	内容
MS138					
49	3	2	29b	956V957	暗号文 Fühle mich müde und krank. Will nicht versuchen zu arbeiten, wenn es mir nicht leicht fällt, weil sonst ja doch nichts herauskommt. [疲れているし、具合がわるい。楽にならなければ、仕事をしようとはしないだろう。そのようなときは、やはりなにも生み出されないから。]
			30a	964V965	暗号文 War zehn Tage lang mit Ben zusammen. Schöne Zeit. Immer liebevoll... War nicht mehr gesund, schlechter Schlaf. - Weiß nicht wie es weitergehen wird. [10日間、ベン*7と一緒にだった。美しい時間。いつも愛情にあふれ...もう健康ではないし、よく眠れない。——これからどうなるか、わからない。]
		16	30b	965V966	暗号文 Oft ist meine Seele wie tot. [しばしば、わたしのこころは死んでいるようだ。]
	965V966			CV p.94/ p.222*8	
	965V966			CV p.94/ p.223	
	965V966			CV p.94/ p.223	
	965V966			CV p.94/ p.223	
	965V966			CV p.94/ p.224	
	965V966			CV p.94/ p.224	
	965V966	CV p.95/ p.224			
	5	20	32b	978V979	CV p.95/ p.225
			32b	978V979	CV p.95/ p.225
			32b-33a	979V	CV p.95/ p.225

*1 CVの日付は6日。

*2 以前の学生のモーリス・ドゥルーリー。当時、ダブリンの病院で精神科医として勤めていた。

*3 おそらく、ジョン・ウィズダムのこと。

*4 おそらく、A. J. エイヤーのこと。

*5 一番上の姉ヘルミーネ。当時、癌で闘病していた。

*6 三番目の姉マルガレーテ。

*7 友人のベン・リチャーズ。

*8 CVの日付は17日。965V966は、すべて同様。

参考：MS137 後半、MS138 執筆時期のウィトゲンシュタイン

MS137 後半、MS138 を執筆していた、1948 年秋から 49 年初夏のあいだ、ウィトゲンシュタインはどのように過ごしていたのか。手稿の記述ともリンクさせながら、ごく簡単にまとめておきたい⁹。

『心理学の哲学 2』としてのちに出版されるタイプ原稿 (TS232) を、ケンブリッジで完成させたところからはじめるのがよからう。これが、48 年 10 月 16 日のこととされる¹⁰。その後、かれはアイルランドのダブリンに戻った。ケンブリッジを辞して (47 年秋) から、マルコム の招待に応じてアメリカに発つ (49 年夏) までのおよそ 2 年間、かれはさまざまな場所に滞在しているが、少なくとも書くことに集中するときの拠点はアイルランドにあった。当時、ダブリンには、かつての学生で精神科医になったモーリス・ドゥルーリーがおり、下宿先から健康状態に至るまで、親身に世話をしていた様子が、伝記や回想録からうかがえる。健康状態の悪化もあってか、一度その誠実さへの疑いが暗号文で記されているが (MS138 p.11b (49 年 1 月 29 日))、もちろんこれはかれの不実さの証拠ではなく、ウィトゲンシュタインにとってかれがいかに大きな拠り所であったのかを裏返しに示していよう。

MS137 前半は、ドゥルーリーの兄弟が所有するコテージで書かれた。アイルランド西部のコネマラにあり、商店や郵便局、公共施設などはどれも数マイル先にしかなかったという。ケンブリッジからダブリンへ戻ったとき、ウィトゲンシュタインはふたたびこのコテージに行くつもりでいたようだが、そこで冬を過ごすことを心配したドゥルーリーの助言もあって、ダブリンのロス・ホテルに滞在することに予定を変更した。ここで MS137 後半、MS138 が書かれることになる。また、この時期に MS169 (『最終草稿 2』所収) も作成されたと考えられている¹¹。

MS137 後半を書いた秋から冬にかけての時期、かれの仕事は非常に充実していたようだ。それを物語るエピソードが残されている。ダブリン滞在中、かれはほとんど毎日のようにドゥルーリーに会い、ホテル近くの公園や動物園を散歩し、その会員室や近くのカフェでランチをとみにしたという。ドゥルーリーはこう回想している。

かれ〔ワイトゲンシュタイン〕は、たくさん書いているようだった。部屋に行くと、ほとんどいつも仕事をしていたし、出かける前にしばらくつづけようとした。(中略) ランチに行く予定だったときに、かれは「これが終わるまでちょっと待ってくれ」と言う前から、なにも言わずに2時間書きつづけた。終えたときにはランチの時間がとっくに過ぎていたことに、かれはまったく気づいていないようだった。¹²

ワイトゲンシュタイン自身、11月16日付のノーマン・マルコムへの手紙で、つぎのように書いている。

ここ〔ダブリン〕についたら、驚いたことに、また仕事ができるようになっていた。頭のなかに太陽が輝いている束の間に、取り入れを済ませたい思いに駆られている。¹³

11月には1、2週間ほど友人のベン・リチャーズが、12月には最初の2週間にエリザベス・アンスコム、そのすぐ後にはラッシュ・リースが訪れて元旦まで滞在した。アンスコム、リースとは、そのとき書いていたものについて、議論したと言われている¹⁴。

かれらの滞在が、ワイトゲンシュタインの哲学的思考にもなにがしかの影響を与えたのではないかと想像したくなるが、直接的な記述を手稿に探ることはできない。しかし、『探究』第II部を並べてみると、興味深い符合が浮かび上がる。『探究』第II部において中核をなす主題のひとつが、アスペクト体験(xi章)であることはまちがいないが、その諸節の多くが、12月以降の手稿から採られている。12月11日に書かれた記述(MS137 p.120b)——『最終草稿1』では431節——が、『探究』第II部xi章冒頭の111節と似た内容を持ち¹⁵、同日に書かれた『最終草稿1』432-435節までの一連の考察が、ほぼそのまま『探究』第II部の112-115節に対応している。その後もかなりの節がまとまってxi章に採用されており、この時期のかれの思考の充実ぶりがうかがえる。もちろんこれは想像の域を出ないが、かれらとの議論がワイトゲンシュタインの哲学的思考を活性化させたということは、あり得そうなことではある。

ところが、1月のはじめには、健康状態が悪化する。MS138にノートが新しくなった1月15日、その冒頭には「今週は具合が悪かった。腸の感染症。いまもまだ仕事ができない」(MS138

p.1a) と暗号で記されている。MS137 への最後の書き込みは 8 日であり、この間 1 週間、空いている。1 月 28 日付のマルコムへの手紙には、つぎのようである。

この 3 ヶ月くらい仕事は順調にはかどったのだが、3 週間前に腸の伝染病みたいなものにかかって、これがまだ治らない。(中略) もちろん、これが仕事にいいはずはない。1 週間はまったく中断し、そのあとも違うようなスピードでつづけている。¹⁶

30 日には、胃炎以外に悪いところは見つからなかったという医師の診断が記されているが (MS138 p.12b)、そのあとも、健康状態は完全には回復しなかったようだ。MS138 には、MS137 後半と比べて日記的記述が増えており、その多くは疲労や体調の悪さから仕事ができないことを訴えるものである。

そして、この時期もうひとつかれをひどく苦しませていたのが、15 歳上の姉、ヘルミーネが癌で闘病中であったことだ。2 月 10 日、22 日に彼女について書いている。その筆致は胸に迫るものがあるが、興味深いのは、ひとの性質についてのかれの考えが垣間見えることである。

彼女は多方面に才能があり、分別があった。しかし、白日のもとにむき出しにではなく、覆い隠されて。ひとの性質がそうあるべきように。(MS138 p.27a (49 年 2 月 22 日))

4 月には、彼女を見舞うためにウィーンに滞在している。MS138 にこの期間の記入はない¹⁷。

1 月中旬以降、仕事ができないことに苦しむ様子が何度も綴られているが、一方で、2 月 18 日付のマルコムへの手紙にはこう書いている。

仕事は、わりとうまくいっている。6 週間前とは比べ物にならないが。少し具合が悪かったこともあるし、いろいろなことで心労が重なっていたから。¹⁸

おそらくは、自身の状態と折り合いをつけながら、仕事はつづけられたのだろう。実際、この時期の考察も —— たしかに、前年の 10 月から 12 月頃に比べれば、書くペースは落ちている

ものの、『探究』第II部、多くはxi章の後半、216節以降に採用されている。このことは、かれ自身がこれらの考察に一定の評価を与えていたことを示している。

しかし、3月初旬以降、仕事はとまってしまう。ベンの来訪が幸福な時間をもたらしたことが3日の日記からうかがえるが、その後2週間はいっさいの記入がなく、16日に一度再開されるものの、ふたたびおよそ丸2ヶ月空いている。この間にはウィーン滞在があった。最後の日付は5月20日であり、この日いくつかの考察が書かれたところでMS138は終わっている。

5月16日にはウィーンからダブリンへ戻ったようである。それからまもなく、健康状態を心配したドゥルーラーが、トリニティ・カレッジの医学部教授のところへ行くよう説得した。悪いところが見つければ、率直に言ってほしい旨をその医師に伝えるよう、ドゥルーラーは念を押されている¹⁹。自分の病状について、隠されたくはなかったのであろう。胃に腫瘍の疑いがあったものの、検査の結果は原因不明の貧血であった。その後、体調は少しずつ回復し、『探究』第II部の元となった清書稿（MS144）を作成、さらには、アメリカに発つ前の6月に、現在は失われた『探究』第II部のタイプ原稿（TS234）を準備したとされている²⁰。

参考文献

- Drury, M. O'C (1981): *Conversations with Wittgenstein*, in ed. by Rush Rhees, *Recollections of Wittgenstein*, Oxford University Press.
- 鬼界 彰夫(2003):『ウィトゲンシュタインはこう考えた—哲学的思考の全軌跡 1912-1951』, 講談社現代新書.
- Malcolm, Norman (1958): *Ludwig Wittgenstein, A Memoir by Norman Malcolm, with a Biographical Sketch by G. H. von Wright*, Oxford University Press. (板坂元 訳『ウィトゲンシュタイン—天才哲学者の思い出』, 平凡社, 1998.)
- Monk, Ray (1991): *Ludwig Wittgenstein -The Duty of Genius*, Vintage Books. (岡田雅勝 訳『ウィトゲンシュタイン—天才の責務』 1, 2巻, みすず書房, 1994.)
- von Wright, G.H(1982): 'The Origin and Composition of the *Philosophical Investigations*', in *Wittgenstein*, Basil Blackwell, pp.111-136.
- (1993): 'The Wittgenstein Papers', in *Wittgenstein*, Basil Blackwell, pp.35-62. (飯田隆 訳「ウィトゲンシュタインの遺稿」、『ウィトゲンシュタイン読本』所収, 法政大学出版局, 1995, pp.335-374.)

注

- ¹ 鬼界は、ウィトゲンシュタインのテキストの作成過程を、〈一次手稿〉—〈最終手稿〉—〈一次タイプ原稿〉—〈最終タイプ原稿〉の4段階からなるとしている（鬼界(2003) pp.19, 20）。この分類に基づけば、日付入りのノートであるこのテキストは一次手稿にあたる。
- ² LW1 Editors' Preface, CV Foreword to the Edition of 1977.
- ³ cf. LW1 Editors' Preface.
- ⁴ 名詞ならば「転轍機」を、形容詞ならば格変化して「柔らかい」を、動詞ならば命令形として「退け」を意味する。
- ⁵ ドゥルーリーの回想によれば、ウィトゲンシュタインはあるとき——書いているものについて話すのはそのときが初めてだったというが——、ウサギ-アヒル図形をかれに見せて、つぎのように言ったという。「さて、あるものがなにかに見える (seeing something as something) とき、なにが生じているか言ってごらん。簡単ではないよ。」これにドゥルーリーは、ウォードのあのことばを引いて答えたという (Drury(1984) p.159)。モンクの推測するように (Monk(1991) p.537)、この会話がウィトゲンシュタインにあの一文を引用させたというのが事実だとすれば、「見えること」とりわけアスペクト体験と意味体験との連関がここに読み取られるという本稿の主張を補強する傍証になろう。しかし、この推測には疑わしいところが残されている。というのも、ドゥルーリーはこの会話を49年のことと回想しているが、手稿の日付は48年だからだ。
- ⁶ この種のメモは『最終草稿1』でもほとんどの場合、載録されている。それがここではなぜ落とされたのかは、不明である。
- ⁷ これらの記号がなにを意味するのかは、『最終草稿1』69節につけられた編者の註を参考にした。
- ⁸ 本文で挙げていない194節は、193節「考えること」への注釈的位置づけである。
- ⁹ 伝記的な事実については、Drury(1984), Malcolm(1958), Monk(1991)を参照した。
- ¹⁰ Monk(1991) p. 535.
- ¹¹ これには日付が書き込まれておらず、作成時期について、いくつかの推測が立てられている。『最終草稿2』の編者は1948年晩秋か49年の春には書かれはじめているとし (LW2, Editors' Preface)、Wiley-Blackwell版の『探究』第4版では、MS137後半と同時期とされている (PI, Editorial Preface to the Fourth Edition, p.x)。また、フォン・ライトは、49年4月から5月にかけてのウィーン滞在中に作成されたと推測している (von Wright(1982) p.134. 註17も参照のこと)。
- ¹² Drury(1984) p.156.
- ¹³ Malcolm(1958) p.78. なお、手紙の日付はMonk(1991) p.536を参照した。
- ¹⁴ Monk(1991) pp.538-539.
- ¹⁵ 『探究』第II部と手稿との同定は、『最終草稿1』編者によって加えられた相互参照の指示に依っている。なお、xi章111節と近い記述は『最終草稿1』180節にもある。
- ¹⁶ Malcolm(1958) p.79. なお、手紙の日付はMonk(1991) p.636を参照した。
- ¹⁷ MS169が作成されたのは、このウィーン滞在中だとフォン・ライトは推測している。そう考えることで、この間の記載がMS138にない理由が説明できるとしている (von Wright(1982) p.134.)。註11参照。
- ¹⁸ Malcolm(1958) p.80. なお、手紙の日付はMonk(1991) p.637を参照した。
- ¹⁹ Drury(1984) p.167.
- ²⁰ Monk(1991) pp.542-544.

(すがさき・よしの 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学)